法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

「パートナーシップ」に向けて : 『コレクション』から

イナザワ, コウイチ / 稲沢, 公一 / INAZAWA, Koichi

(出版者 / Publisher)
法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The bulletin of the Faculty of Social Policy and Administration : reviewing research and practice for human and social well-being / 現代福祉研究
(巻 / Volume)
5
(開始ページ / Start Page)
3
(終了ページ / End Page)
7
(発行年 / Year)
2005-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00015442

「パートナーシップ」に向けて―『コレクション』から―

稲　沢　公　一

社会福祉援助（ソーシャルワーク）論の領域において、久保先生は、独自の視点から次々と鋭い指摘をなさってきた。その中でも、特に援助関係のあるべき姿として、「パートナーシップ」を重視されてきたことはよく知られている。ここでは、パートナーシップの実現に向けて、先生が示された道筋の一端を浮き彫りにしたい。

1．「非専門性」の重視

『コレクション１～５』（相川書房）が刊行されて、初期の論文やエッセイなど、これまでなかなか目にすることのできなかった論考にもふれることができるようになった。そのおかげで、私事ながら、あらためて確認できたのは、先生が「援助とは何か」といった根源的な問いを、研究者としての出発段階から、自らの中心的な問いとして引き受けてこられたこと、および、この問いをまさに先生独自の問い方で、すなわち、「非専門性」を重視する立場から問い続けていらっしゃったという事実である。

たとえば、1975年の論文では、次のように明言されている。

「当面の私の関心は、非専門家（自覚しないで、しかも結果的には深く援助を与えている人たち）の援助関係の構造ないし特質といったものを知りたいということである。…中略…別言すれば世俗とか日常性の中での『専門的関係』ではなく『ふつうの関係』に内在する援助性を追求することが必要ではないかと思う。専門という言葉のもとに切りすててきたものが多くあると思われるからである。」（コレクション５，167-8頁）

通常、援助とは何かと問う場合、「専門性」という言葉に何が含まれるのかという問いから始めることが多い。しかし、先生は、反対に「専門という言葉のもとに切りすててきたもの」をこそ問いのテーマとしてこられた。専門性という枠組みに何が入るかではなく、逆に、専門性には収まりきらない何かを見定めながら、援助とは何かといった本質的な問いに立ち向かっていこうとされていたのである。

また、2004年に行われたインタビューでも「非専門化(ママ→家)の援助機能」（コレクション２，

xvi頁）が研究テーマにあげられていることから、この問いが生涯を貫く問題意識の一つであったことがわかる。

このように専門性が切りすててきたものを問うことは、専門性の内実から問い始める「研究者」が発する問いとしては稀有である。寡聞にして、本邦では、久保先生以外に、こうした立場から援助の本質に迫ろうとした研究者を知らない。だが、この問いを繰り返してきた領域もたしかに存在する。当事者運動である。というのも、そこでは、「専門的なるもの」に対する異議が何らかの形で申し立てられ、専門性に組み込まれない何かが大切にされてきたからである。したがって、先生の問い方もまた、研究者としては新奇であるが、当事者としては自然な問い方であったといえる。

２．当事者性の自覚

先生がご自身の当事者性を強く意識してこられたことは、各所でふれられている。たとえば、セルフヘルプ・グループに関心を持つようになった理由として、

「まず自分自身が『当事者』であったこと。とりわけ10代から20代にかけて、前後３年ほど結核で入院生活を送った経験は大きい。患者の立場にどっぷり身をおいたので、援助関係という点からいえば、患者という『援助の受け手』の側から、医者やナースの『援助の提供者』をつねに見続けていた。後に、社会福祉の勉強をするようになるが、すでに『当事者』から発想するという視点が、知らず知らずのうちに身にしみ込んでいた。」（コレクション４，３頁）

とも述べられ、あるいはまた、2002年のインタビューの中では、

「私の中には、利用者・当事者によって育てられてきたという実感が強くあります。…中略…ですから、困ったことに、いまだに研究者というアイデンティティがあまりないのです。」（コレクション２，136頁）

と発言されている。

このように、自らの当事者性を強く意識しておられた先生にとって、研究者としてのアイデンティティがぎこちないものであったことは想像がつく。しかし、先生は、当事者と研究者との架橋になるべく、研究者としての自分をあえて引き受けてこられたのではないだろうか。それにともなう「ぎこちなさ」は、当事者に育ててもらっているという実感を得ることで、何とか軽減させることができたのであった。

こうしたご自身の基本的な立場や姿勢について、先生は、先の引用に続けて、「当事者に寄り添うこと」とも表現されている（同上）。ここから「パートナーシップ」の原型を読み取ることは難しいことではない。

3.「パートナーシップ」

先生にとって、パートナーシップとは、援助関係のあるべき姿をも意味していた。だからこそ、それは、次のような一見厳しいメッセージとともに提示されることがある。

「パートナーシップは、当事者の人たちと『人間として対等である』ことが原点である。セルフヘルプ・グループと当事者の人たちが投げかけているものは、『本当の援助とは何か』という厳しい問いに他ならない。専門職の人たちは自己改革を迫られているというべきだろう。」(コレクション4，146頁)

これは、もともと2002年発刊のテキストに収められた一文であり、初学者に向けて、専門職にはパートナーシップを実現すべく自己改革が求められていると指摘されている。だが、まず最初に自己改革が求められたのは、あるいは、「本当の援助とは何か」という問いを繰り返し投げつけられたのは、まさしく、専門職としての、研究者としての先生ご自身だったのではないだろうか。おそらく、先生は、さまざまな場で、いろいろな人たちから、この問いを繰り返し突きつけられ、あるいは、倦むことなく自ら反芻し、全身で受け止めた上で、専門職や研究者が当事者と取り結ぶ援助関係のあるべき姿として「パートナーシップ」という言葉に熱い思いを込めていかれたはずである。

たしかに、久保先生もまた、より早い時期には、たとえば、「両者が『対等である』という思想」(コレクション4，135頁，1987年)、あるいは「互いに協力し合う対等の関係」(コレクション3，144頁，1988年)、といった対等性中心の表現を用いておられたのであって、今でも、巷間に流布しているパートナーシップでは、「対等であること」のみが重視され、その実現を援助者に要請する傾向が強いといえる。

だが、先に引用した2002年の時点では、「人間として対等であること」がパートナーシップの原点として位置づけられるようになった。すなわち、先生は、この概念の規定として「対等であること」に「人間として」という要素を付加されたのだといってよい。

では、なぜわざわざそのような追補が行われたのであろうか。以下は、臆測に過ぎないのだが、対等性のみにこだわっていては、援助の場面で実際上身動きが取れなくなるからだろうと思われる。対等性の実現を明示するメルクマールは存在しないから、どうなれば対等といえるのかは、誰にもわからない。そのため、対等性の実現だけを目指せば、援助者の思い込みによる偽善に堕する危険性も増大する。そうした罠に陥らないためには、対等性を実現せよと命じるだけでなく、そこに至る道筋を提示する必要がある。おそらく、「人間として」という要素は、対等性に至る条件として付け加えられたのではないだろうか。

ただし、その場合でも、では「人間として」向き合うためにはどうすればいいのかという問いが新たに発生することになる。

4．援助の原点を見据えて

どうすれば、「人間として」向き合えるのか。この問いに対する先生のお考えは、主著とも位置づけられる『自立のための援助論』（川島書店）の「あとがき」に、やや控え目ながら、しかし、はっきりと記されている。

「いわゆる『専門家』『援助者』は、当事者の重さの前で、一度は、自らの専門性が色あせるほどの経験、無力になる経験をする必要があるのではないか。」（227頁）

もともとこの文章は、1988年に発表されているが、2002年のインタビュー（コレクション2，138頁）でも先生自ら取り上げて言及していらっしゃるほどのお気に入りであった。ここに明示されているのは、「自らの専門性が色あせる」とき、人は、専門家や研究者としてではなく、一人の「人間として」、当事者に向き合わざるを得ないということである。すなわち、専門家が自分の恣意で専門性を捨てるのではなく、捨てざるを得ない地点にまで追い込まれ、そうしたいわば「全面降伏」とも呼べる経験によって、専門家の自己改革が導出されうると考えられていたのであった。

ここで、パートナーシップに向けて先生が示された道程を粗雑ながら整理してみると、まずは、「無力になる経験」に遭遇すること、にもかかわらず、その場に踏みとどまって一人の「人間として」向き合うこと、それによって、「対等であること」という意味でのパートナーシップの実現可能性が、おそらくわずかながらに残されることになる。

もちろん、人は「無力になる経験」などに遭遇すれば、おおよそ逃げ出すものであるし、そもそもそうした経験を可能な限り避けようとする。また、「人間として」向き合えば、必然的に「対等であること」が保証されるわけでもなく、さらには、たとえ対等性が実現したとしても、直ちに友好的・協力的関係になるとは限らず、競合的・対立的な事態を想定することも可能である。いずれも後続に対する十分条件とはなっていないのである。

しかし、逆に、もし、対等性が実現するならば、一人の人間として対峙することが必要であり、また、そのための最良の契機が専門性の無力さを思い知らされることであるとはいえる。少なくとも先生は、このプロセスをおそらくご自身の体験から知悉されていたはずである。というのも、先生が大切にされてきた「当事者によって育てられてきたという実感」は、「無力になる経験」によって引き起こされる状態、すなわち、どうすればいいのかわからないような状態においてこそ最も強く感受されうるからである。

先生が見据えておられたのは、当事者と専門家などといった立場性の違いが瑣事として消失し、人と人との間で営まれる「援助の原点」が現出するこうした地点だったのではないかと推察される。「パートナーシップ」という言葉に込められた先生の蘊奥な思いを、今後私たちは、どれほど汲み取り受け止めることができるのだろうか。その課題の峻厳さを前にして、今はただ、先生の早すぎた死に、痛悼の念を禁じ得ないのみである。